16　次の文章は『狭衣物語』の一節である。狭衣中将は、幼い頃から兄妹のように育てられたの源氏の宮に恋心を抱いている。中将の恋心には周囲も源氏の宮も気づいていない。中将のことを兄のように思っている源氏の宮に、中将がついに告白するという場面である。文章を読んで後の問いに答えよ。（設問の都合上、本文の表記を改変した箇所がある。）　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〈佐賀大〉二〇二三年度出題

　暑さのわりなきほどは、恋鳥にも劣らず、心ひとつにこがれたまふを知る人もなし。昼つかた、源氏の宮の御かたに参りたまへれば、白き薄物の単衣着たまひて、いと赤き紙なる書を①見たまふ。御色は単衣よりも白う透きたまへるに、額の髪のゆらゆらとこぼれたまへる、裾はやがてうしろとひとしう引かれいきて、ちたうたたなはりたる裾のそぎ末、幾年を限りに生ひゆかむとすらむと、ところせげなるものから、たをたをとあてになまめかしう見えたまふ。隠れなき御単衣に御髪のひまひまより見えたる御腰つき、腕などのうつくしさは、人にも似たまはねば、「あまり思ひしみにけむわが目からにや」とまもられて、例の胸はつぶつぶと鳴り騒げど、よく忍びかへして、つれなくＡもてなしたまへり。

　「いと暑きほどに、いかなる御書御覧ずるぞ」と②聞こえたまへば、「斎院より絵ども賜はせたる」とて、くまなき日の気色にはなばなとにほひみちたまへる御顔つきを、まばゆげにおぼして、すこしうち赤みてこの御書に紛らはしたまへる用意、気色、まみなど言ひつくすべうもあらずめでたう見えたまふに、涙さへ落ちぬべうおぼえたまふ紛らはしに、この絵どもを見たまへば、「五中将の日記をいとめでたう書きたるなりけり」と見るに、あひなうとつ心なる心地して、目とどまる所々多かるに、え忍びたまはで、「こはいかが御覧ずる」とてさし寄せたまふままに、

　　　　　よしさらば昔のあとをたづね見よ我のみまよふ恋の道かは

とも言ひやらず、涙のほろほろとこぼるるをだに、「あやし」と③おぼすに、御手をさへとらへて、のしがらみせきやらぬ気色なるに、宮いとあさましう恐ろしうなりたまひて、やがてとらへたまへる御腕にうつぶし臥したまひぬる気色の、言ひ知らぬものにとらへられたらむやうにおぼしたるも、いとど心騒ぎして、ここら思ひつむる心のうちを、かたはしだにもうち出づべうもなく、涙にのみおぼほれたまへり。

　「はけなく侍りしより、心ざしことに思ひそめたてまつりて、ここらの年ごろつもりぬる心のうちは、あまり知らせたてまつらでやみなむも、も後の世のためまでうしろめたう侍るべきにより、もらしはべりぬるこそあさましけれ。またいとかうあるまじう見苦しきもの思ふ人のたぐひ、昔も侍りけるにやと見ゆるに、あまりうとましげにおぼしめしたるも心憂くこそ。

　　　　　Ｂかくばかり思ひこがれて年経やとの八島のけぶりにも問へ」

かたはしだにもらしそめつれば、年を経て思ひこがれて過ごしたまへる心のうちを、聞こえ知らせたてまつりたまふに、恐ろしき夢を見る心地したまひて、わななかれたまふを、「むげに御覧じ知らざらむ人のやうに、かばかりをだに恐ろしとおぼしたること」と、泣く泣くＣ恨みたまふほどに、人近く参る気色なれば、すこしのきて、「今よりはいかに憎ませたまはむずらむな。にはかならむ御心変りはなかなか人目あやしくはべらむ。Ｄおぼしうとむなよ。切りとほしはべるとも、聞もあるまじきことと思ひ知りたれば、よも見苦しき心のほどは御覧ぜられじ。あまりにａ思ひわびはべりなば、通はぬ里にぞ行き隠れはべらむかし。さやうならむ折は、さぞかしとおぼしめし出でさせたまへかしとてなむ」など、聞こえ知らせたまふことども思ひやるべし。

注　水恋鳥にも劣らず……水を恋い焦がれる水恋鳥にも劣らず。「水恋鳥」はカワセミ科の鳥。

こちたうたたなはりたる裾のそぎ末……ぎっしりと重なり合っている黒髪を削いでそろえた先端。

在五中将の日記……『伊勢物語』のこと。

ひとつ心なる心地して……自分が在五中将（在原業平）と同じ心のような気持ちがして。

袖のしがらみせきやらぬ気色なるに……袖を当ててもあふれる涙をせき止めかねるご様子に。

いはけなく侍りしより……幼い子どもでございました頃より。この中将のセリフは傍線部Ｂの歌まで続く。

誰も……恋をする者にとっても恋される者にとっても。

室の八島……室六所大明神の社前の池にある八つの島。池中から常に煙が上がっている。

岩切りとほしはべるとも……激情が奔流となっても。「吉野川岩切り通し行く水の音には立てじ恋は死ぬとも」の和歌を踏まえている。

音聞もあるまじきことと思ひ知りたれば……世間への聞こえもみっともないことと自覚しているから。

問１　波線部①～③の主語を答えよ。

問２　二重傍線部ａ「思ひわびはべりなば」について、⑴助動詞「な」の文法的意味と活用形を答え、⑵「思ひわびはべりなば」を口語訳せよ。

問３　傍線部Ａ「もてなしたまへり」について次の問いに答えよ。

　　⑴　誰が誰に対してどのような態度を取ったのか、簡潔に答えよ。

　　⑵　なぜそのような態度を取ったのか、説明せよ。

問４　傍線部Ｂの歌に込められた思いを簡潔に説明せよ。

◎問５　傍線部Ｃ「恨みたまふ」は「恨み言をおっしゃる」という意味だが、誰がどのようなことに対して恨み言を言っているのか、説明せよ。

問６　傍線部Ｄ「おぼしうとむなよ」（思し疎むなよ）とあるが、なぜこのように言ったのか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝源氏の宮　　②＝狭衣中将　　③＝源氏の宮

問２　⑴＝完了　未然形

　　　⑵＝苦しく思われましたならば

問３　⑴＝Ａ狭中将衣が、源氏の宮に対して、Ｂ源氏の宮を間近に見て強くひかれ胸が高鳴るのを隠すため、Ｃそ知らぬ様子に振る舞っている態度。

Ａがなければ全体０。

Ａ＝３

Ｂ＝３〔「間近に」という表現はなくてもよい。〕

Ｃ＝４〔「平然と」など同内容可。〕

⑵＝Ａ幼い頃から兄妹同様に育った源氏の宮に恋心を抱くことは、Ｂいとわしく、あってはならないことで、Ｃ気づかれて源氏の宮との関係を壊したくないと思ったから。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝４〔同内容可。〕

Ｂ＝２〔「あってはならない」という内容であれば可。〕

Ｃ＝４〔「源氏の宮との関係を壊したくない」という内容がなければ不可。〕

問４　Ａ人知れず幼い頃からずっと室の八島の煙のように恋い焦がれ続けてきた、Ｂ源氏の宮に対する燃えるような恋心をＣ知ってほしいという思い。

Ａ＝５〔「人知れず」「こっそりと」などの内容がなければ減点２。〕

Ｂ＝３〔「強い思い」「激しい恋心」という内容があれば可。〕

Ｃ＝２〔「源氏の宮に打ち明ける」という内容であれば可。〕

問５　Ａ狭衣中将が、Ｂ自らの恋心を打ち明けたことに対して、Ｃ源氏の宮がＤ恐ろしそうに震えながら、知らない他人のように自分を見ることに対して恨み言を言っている。

Ａがなければ全体０。

Ａ＝２

Ｂ＝２〔同内容可。〕

Ｃ＝２

Ｄ＝４〔源氏の宮が恐怖を感じる様子に触れていなければ減点２。源氏の宮が狭衣中将を他人のように見る、という内容がなければ減点２。〕

問６　Ａ自分は当面の間態度を変えないように努力するが、Ｂ源氏の宮が、狭衣中将に対する態度を突然変化させたのでは、Ｃ周囲の人たちが不審に思うことが危惧されるから。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔同内容可。〕

Ｂ＝４〔「源氏の宮の様子の変化」という内容があれば可。〕

Ｃ＝４〔「周囲の不審を危惧する」という内容がなければ不可。〕

【現代語訳】

　暑さが堪えがたい折は、（狭衣中将が、水を恋い焦がれる）水恋鳥にも劣らず、一心に（源氏の宮を）恋い焦がれていらっしゃるのを察する人もいない。昼頃、（中将が）源氏の宮のお部屋に参上なさったところ、（宮は）白い薄物の単衣をお召しになって、たいそう赤い料紙の書物をご覧にな（ってい）る。お（肌の）色は単衣よりも白く透きとおっていらっしゃるうえに、額の髪がゆらゆらと垂れかかっていらっしゃって、（その髪の）先端はそのまま背中と同じ方に長く伸びていって、ぎっしりと重なり合っている（黒髪を）いでそろえた先端は、（これから先）何年を限度として伸びていこうとしているのだろうと（思われて）、隙間もないほどの（豊かな）様子だが、しなやかで気品がありみずみずしく美しくお見えになる。（薄くて、体の線の）隠れようもない御単衣に御髪の隙間隙間を通して見えているお体つき、腕などのかわいらしさは、（どの）ほかの女性にも似ていらっしゃらない（ほど素晴らしく思われる）ので、（中将は）「あまりに深く思いこんでしまったような自分の目のせいであろうか」と自然と見つめてしまって、いつものように胸はどきどきと鳴り騒ぐが、しっかりと自制を取り戻して、そ知らぬ様子に振る舞っていらっしゃる。

　（中将が）「（こんな）ひどく暑い時節に、いったいどんな御本をご覧にな（ってい）るのか」と（宮に）申し上げなさると、（宮は）「斎院から、絵物語を幾つか頂戴した（のです）」とおっしゃって、陰り一つない（夏の）日ざしに華やかに美しさの満ち溢れていらっしゃる（中将の）お顔を、（宮は）まぶしいとお思いになって、少し頰を赤らめてこの御本（を見るふり）で紛らわせなさる心配り、様子、目元（の美しさ）など何とも表現しきることができない（ほど）すばらしくお見えになるので、（中将は）涙までこぼれてしまいそうに感じなさるのを紛らすために、この絵物語の絵をご覧になると、「『伊勢物語』の日記をたいそう見事に描いたのだなあ」と見ると、ただもう自分が在五中将と同じ心のような気持ちがして、目がとまるあれこれの箇所が多いので、我慢することがおできにならずに、「この絵はどうご覧になりますか」と言って（身を）近くへ寄せなさるそのままに、

　ええままよ、（こうなったら黙ったままではいられない。）昔の在五の中将の例を尋ねてごらんなさい。これは私だけが迷っている恋の道か（、いやこんな苦しい恋に迷うのは私だけではなかったのだ）。

とも言いきらずに、涙がぽろぽろとこぼれ落ちることすら、（宮は）「妙なことだ」とお思いになる時に、（中将は）宮の御手までも取って、袖を当ててもあふれる涙をせき止めかねるご様子に、宮はたいそう驚きあきれ恐ろしくおなりになって、そのまま（中将が）とらえていらっしゃる御腕に突っ伏してしまわれた様子が、得体の知れないものにつかまっているかのようにお思いになるのも、（中将は）ますます心が騒いで、たくさん思いを重ねてきた胸の内を、せめてその片端だけでも打ち明け（たいのにそうす）ることもできず、ただ涙に暮れていらっしゃる。

　「幼い子どもでございました頃より、（私は）特別な思いをお寄せ申し上げ始めて、（それから）多くの年月の間に積もってしまった心の中は、まったく（あなたに）お知らせ申し上げないで終わってしまうだろうことも、恋をする者にとっても恋される者にとっても来世の（運命の）ためまでも気がかりになるはずのことですから、（こうして思いを）漏らしましたことに（我ながら）あきれてしまう。またたいそうこうしてあってはならない見苦しいもの思いをする人の同類は、昔もいたのでしょうかと思えるので、（あなたが）あまりにいとわしそうにお思いになっているのもつらく思われて。

　私がこれほどまでにあなたを思い焦がれて何年過ごしてきたのかと、室の八島の煙にでも尋ねてください」

（こうして中将が心の）片端にせよ漏らし始めてしまって、（中将が）長年思い焦がれてお過ごしになった心の内を、（宮に）知らせ申し上げなさったので、（宮は）恐ろしい夢を見る気持ちがなさって、わなわなと震えていらっしゃるのを、（中将は）「むやみに（私を）まったくご存じではない人のように、たったこれくらい（のこと）を恐ろしいとお思いになることよ」と、泣く泣く恨み言を言いなさる時に、人が近く参上する様子なので、（中将は）少し後ろにさがって、「今からはどんなに（私を）お憎みになることでしょうね。急に私への態度がお変わりになるのではかえって人目には不審でありましょう。（私を）お嫌いにならないでくださいね。激情が奔流となりましても、世間への聞こえもみっともないことと自覚していますから、けっして見苦しい心の様子はお目にかけますまい。堪えきれないほど問２⑵苦しく思われましたならば、人も通わない山里に行き隠れましょうよ。そのようになるような時は、（私が）それほど（恋情に堪えきれなかったのだ）と思い出しなさってほしいと思いまして」などと、知らせ申し上げなさる（中将の）言葉の数々を思いやるべきである。